

ジェンダー平等実現に向けて

3年 海野 あかり

つい先日、お茶の水女子大は、自身の性自認にもとづき、女子大学で学ぶことを希望するトランスジェンダーの学生を、2020年度から受け入れることを発表した。

トランスジェンダーとは、近年頻繁に話題に上る、LGBTといった性的マイノリティの内のひとつで、性的違和を持つ人の総称である。特に体の性と心の性は一致しないが、外科的手術は望まない人のことを指す。同大の学長は、「本学はすべての女性たちがその年齢や国籍に関係なく、個々人の尊厳と権利を保障されて、自身の学びを進化させ、自由に自己の資質能力を開発させることを目指している。性自認が女性であって、真摯に女子大学で学ぶことを希望する人を受け入れるのは自然な流れだろうと思うし、多様性を包摂する社会としても当然のことと考えた。」と述べている。

LGBTを受容することの重要性が議論される中で、女子大学にトランスジェンダーの人が入学できないという事実にも、今まで全く気づかず、疑問を抱かなかった私は、LGBTについてまだまだ考えるべき点が多いのだと痛感した。トランスジェンダーの人を心の面では受け入れることができても、全てを受け入れることは難しい人も多いのではないだろうか。例えば、更衣室やお手洗いといった設備をどうするか、という懸念もある。

お茶の水女子大の他、津田塾大、奈良女子大なども受け入れを予定しているそうであるから相互で議論し、設備を整え、トランスジェンダーの人やそうでない人にも心地良い環境を作ることが課題であろう。

さて、2015年の国連サミットでSDGs(持続可能な開発目標)が掲げられた。日本では、17個ある目標の内達成率が最も低いのが、まさに「ジェンダー平等を実現しよう」という目標である。現状として、17の目標の達成率を平均したランキングで日本は193国中11位と、悪くはない結果だった。にもかかわらず、世界経済フォーラムが分析した「ジェンダーギャップ指標」では142ヶ国中104位だという。つまり、日本はジェンダー平等の分野が格段に遅れていることは自明だ。逆に言えば、この分野を改善することができれば全体のランキングも少なからず上がるはずだ。

なぜ日本はこんなにもジェンダー平等実現が遅れているのだろうか。御茶ノ水女子大が上記の決定をしたことを踏まえて、海外の女子大の対応はどうであるかを調べた。最も早くトランスジェンダーの学生を受け入れた女子大は、米、ミルズ大で2014年であった。日本よりも6年早い。以降、米国では何校もの女子大でトランスジェンダーの学生を受け入れていることを知った。

関連記事を調べているうちに、更に驚くべきことがあった。スウェーデンやノルウェーなどの北欧地域では、書類を提出するだけで戸籍上の性別を自由に変更できるそうだ。日本では、まず医師に性同一障害と診断されたうえで、性適応手術を受けて初めて性別を変更できるのだ。日本のジェンダー平等実現が困難である一因は、このような基本となる法律にあるのかも知れない。

とはいえ、ジェンダー平等が進まない日本でお茶の水女子大が新たな一歩を踏み出し

たことは日本にとって実に意義深いことである。大学生のうちからトランスジェンダーを含む LGBT の学生と関わりを持ち、相互にコミュニケーションを深めることで LGBT に対する偏見や固定観念を失くし、お互いを理解し合うことができると私は思う。今回のお茶の水女子大の決定が日本の「ジェンダー平等実現」の糸口の一つとなることを期待する。

(出典) お茶の水女子大学 HP

SDSN. HP

World Economic Forum HP

Japan wide ニュース